

「高次のエンパシーを働かせながら主体的に取り組む生徒 ～「情報」「発問」「単元構想」の工夫～」

(単元名：日本は理想の国家に近づいたのか～制度の理想と実態のギャップ～) 文責：山竹 諒

## 1. 授業を構想するにあたって

本校社会科の研究テーマの中で、ウェルビーイングを達成するための課題を考察し、解決に向けて構想していくためには、エンパシーを働かせていくことが求められると考えている。本実践では、より高次のエンパシーを働かせるために、どのような「情報」「発問」「単元構想」の工夫ができるのかということに重点を置いた。(図1)

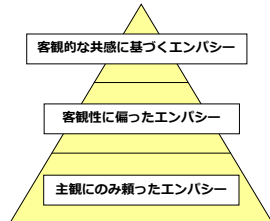


図1 エンパシーの段階

## 2. 単元構想

本実践では、律令国家の形成を一つの単元とし、単元構想を立てた。(全10時間)

時数	○学習課題 ★エンパシーを働かせる補助発問
1	○「理想の国家」とはどんな国家だろう ★誰にとっての「理想の国家」なのだろう
2	○聖徳太子の理想と実態のギャップはなんだろう ★その政策を打ち立てた裏にある当時の状況を考えよう
3	○なぜ「理想の改革」が“敗戦”と“内戦”につながったのだろう ★天皇中心の政治は本当に理想？
4	○農民はどの負担がイヤだった？ ★なぜこんなにも多くの負担があるのだろう
5	○天平文化は誰のための文化だったのか ★なぜ聖武天皇は大仏を建てたのだろう
6	○桓武天皇の“理想”は実現できたのだろうか ★律令政治における理想と、桓武天皇の理想と実態をそれぞれ比較してみよう
7	○なぜ藤原氏が力をつけたのだろう ★「誰」中心の政治だったのだろう
8	○天平文化と国風文化の違いはなんだろう ★文化の違いが意味していることはなんだろう
9	○権力者に理想の国家を提案しよう

	★各政治における良かった点と良くなかった点はどこだろう
10	○「理想の国家」とはどういう国家だろう ★その国家は当時の状況で実現可能？ ★今の社会に通じるところはどこだろう

## 3. 生徒のあらわれ(10時間目)

単元を通して、時の権力者による改革の理想と実態のギャップに着目し、理想の国家像を自分なりに描いてきた生徒が、改めて「理想の国家」について考えた。天皇や豪族、貴族、農民など様々な人の立場に立ち、その立場や境遇を理解し、思いを想像している生徒の様子が見られた。以下は、小集団における生徒のやり取りの一部である。(生徒1=S1)

S1：貴族たちが中心となって行う政治が良い。  
S2：(驚き) 私は聖徳太子の政治に近いものが良い。  
能力のある人が政治を行った方が良い。  
S3：私は独裁的な権力者をつくらず、農民たちが中心の政治が良いと思う。  
S2：一人だけが力を持つ政治は防ぎたい。税もみんな平等に負担するべき。  
T：平等な税って本当に平等？今で言うと消費税？  
S2：確かに土地をたくさん持っている農民は良いけど、土地の少ない農民は税負担が大きくなる。  
S3：現代にもつながるけど、仮にリーダーがいたとしても、国は一人ひとりの農民のものであるという考えを持ってほしい。  
S1：確かに、貴族たちが農民の声を聞こうとしなかったから、政治としては良くなかった。  
S3：単元の始めは、理想の国家って中国に追いつき中国のような国になることだと思っていた。今は天皇中心ではなく、みんな平等な国家が良いと感じる。  
S1：でもみんな平等って当時に実現できたのかな？  
S3：確かに難しそうではあるかも。

## 4. 成果と課題

本実践では、「理想の国家とは何か」という問いを

通して、生徒が歴史的制度や政治の背景を多角的に捉える力を育成することを目指した。その過程において、いくつかの明確な成果と、今後に向けた課題が見えてきた。

まず成果として、第一に、天皇・貴族・豪族・農民など、複数の立場に生徒を置いて思考させたことで、制度の受け止め方や影響の違いに気づき、歴史の多面性を実感することができた。第二に、制度の背景にある権力者の意図や理想を読み取ろうとする姿勢が育まれ、歴史的事実を単なる知識としてではなく、「人間の選択と結果」として捉える思考が見られた。第三に、補助発問を効果的に挿入することで、生徒の視野を広げ、特定の見方に偏らずに考える土台をつくることができた。

一方で、課題も残った。第一に、多様な立場の視点に立つ上で必要となる資料が不足しており、特に庶民や下層階級の思いを想像するには情報が乏しかった。第二に、一部の場面で資料分析に意識が集中しすぎた結果、客観性に偏り、想像力や感情への共感が弱くなる場面も見られた。第三に、「理想の国家」の定義について、



## 5. 考察

今回の実践を通して明らかになったのは、視点を変えて歴史を捉えることが、生徒の理解を深める大きな鍵であるという点である。特に「誰にとっての理想か」という問いを通して、制度や政策を一面的に評価するのではなく、複数の立場や価値観を想定して考える姿勢が芽生えた。

これは、従来の知識中心の歴史学習から、価値判断や倫理的思考を含む学びへと一歩踏み込む可能性を示している。一方で、資料の読み解きが深まるほど、生徒が「事実」に縛られ、想像的思考が抑制されてしまうリスクもあることがわかった。資料に基づく客観性と、人物の思いを想像する主観的思考のバランスをどう取るかは、今後の授業構成において重要な論点である。

また、「理想の国家」という抽象的なテーマを扱う

にあたっては、その言葉の意味を単元の初期段階で共有するだけでなく、学びの中で継続的に問い直していく仕掛けが不可欠である。生徒が自分の中で「理想とは何か」を更新していけるような構成が求められる。

## 6. 今後の展望

今後の実践に向けては、以下の3点が重要であると考えられる。

第一に、多様な人々の感情や立場に寄り添えるような資料の充実が必要である。例えば、政策に対する農民の視点や、地方の下級豪族の戸惑いといった「見えにくい声」を想像させる史料やエピソードを意図的に取り入れていくことが望ましい。

第二に、「理想とは何か」という問いを単発で終わらせず、授業ごとに立ち返る工夫を取り入れたい。例えば、授業後に「今日の学びで、理想の国家像はどう変わったか」と振り返る時間を設けることで、生徒が思考を段階的に深めていくことができる。

第三に、論理的思考と想像的思考の両方を育てるための構成が求められる。史料分析で事実を把握した後に、当時の人々の手紙や記録を創作させるといった活動を組み合わせることで、客観と主観、思考と感情が往復するような学びが実現できる。

本単元が扱った「理想の国家」という問いは、過去を学ぶことを通じて現代を見つめ直す契機にもなりうる。生徒が歴史を現在とつなげ、自らの社会観や価値観を問い直すことこそ、社会科における探究の醍醐味であり、今後もこのような視座を大切にしていきたい。

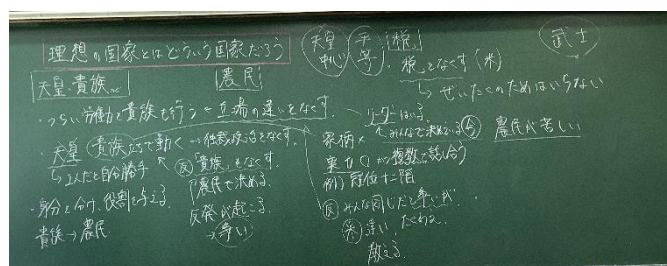


図2 第10時の板書